頬部に発生した類表皮嚢胞の2例

大越 哲也・川村 哲也・新井 哲史
中川 圭介・陳 維 嘉*

Two cases of epidermoid cysts of the cheek

Tetsuya OGOSHI・Tetsuya KAWAMURA・Tetsushi ARAI
Keisuke NAKAGAWA・Wei-Chia CHEN*

Abstract: Epidermoid or dermoid cyst occurs throughout aberrant ectodermal tissue during embryonic development, or inflammatory and traumatic aberration of the epithelium. These cysts occur rarely in oral cavity. It occurs in the oral cavity mostly on the oral floor and rarely on the cheek.

The authors have experienced two cases of epidermoid cysts on the left cheek.

Case 1: 24 years old man. The cyst was well-demarcated and had movability on the left cheek, and could be easily extracted from extra-oral under local anesthesia. The authors supposed that this cyst had a posterior origin, because the patient had an external injury over 2 years ago.

Case 2: 24 years old man. The cyst was well-demarcated and had movability on the left cheek, and could be easily extracted from intra-oral under local anesthesia. The authors supposed that this cyst had an inborn origin, because the patient had not an posterior origin.

Two cases was epidermoid cyst for histopathological diagnosis.

Key words: epidermoid cyst (類表皮嚢胞), cheek (頬部)

緒 言 症 例

類表皮嚢胞あるいは類皮嚢胞は、一般的に胎生期における外胚葉組織の迷入、または外傷や炎症などによる上皮組織の迷入により生じ、身体各部に発生するといわれている¹⁾。口腔領域における発生頻度は比較的少ないとされているが、その大部分は舌下口底にみられ²⁻⁷⁾、頬部への発生は比較的少ないとされている^{2-4, 8-18)}。

今回、著者らは頬部に発生した類表皮嚢胞の2例を経験したので、文献的考察を含めその概要を報告する。

武蔵野赤十字病院歯科口腔外科
(部長：中川圭介)

* 武蔵野赤十字病院病理検査室
(主任：陳 維嘉)

Department of Oral Surgery in Musashino Red Cross Hospital (Chief: Keisuke Nakagawa)

* Department of Pathology in Musashino Red Cross Hospital (Chief: Wei-Chia Chen)

受付日：平成2年4月19日

症例1

患 者：24歳 男性。

初 診：平成元年2月

主 訴：左頬部の無痛性腫瘍。

家族歴および既往歴：特記事項なし。

現病歴：昭和62年4月頃、2階より転落し左頬部を打撲、その後しばらくたってから左頬部の腫瘍に気づいていたが、無痛性であったため放置した。その後腫瘍は徐々に増大する傾向にあったため、歯科治療のため受診していた歯科医院で相談し、当院を紹介された。

現 症

全身所見：体格中等度、栄養状態良好で特記すべき事項は認められなかった。

局所所見：左頬部に直径約15mmの無痛性、弾性軟で可動性を有する腫瘍を認めた(写真1)。

その他、口腔粘膜や皮膚には特に異常所見は認められなかった。

写真1 症例1初診時写真

写真3 症例1病理組織像（扁平上皮波状排列）

写真2 症例1病理組織像（扁平上皮塊）

写真4 症例1病理組織像（深部棘細胞層）

臨床診断：左頬部良性腫瘍。

処置および経過：平成元年2月■，2%キシロカイン（含エピネフリン）の局所麻酔下で口腔外より摘出した。すなわち腫瘍直上に皮膚切開を加え，周囲組織より鈍的に剝離し摘出した。周囲組織との癒着は認められなかった。

摘出物所見：摘出時，被膜の一部を破損してしまったが，大きさ 20×15×15 mm の表面滑沢，淡赤色，楕円球形の腫瘍で泥様軟を呈していた。内容物は黄白色のオカラ状を呈していた。

病理組織学的所見：摘出材料は，示指頭大の扁平上皮塊を形成し（写真2），扁平上皮は散在性のものもあるが，波状排列を示すものが多数認められた（写真3）。塊状物中央部には翻転した扁平上皮が含まれていた。またそのうち表面には不規則な角化層があり，角下層直下には軽度の顆粒細胞の増加，さらに深部には棘細胞層が認められた（写真4）。顆粒空胞変性がみられるが，異形性分裂像は認められなかった。周囲の結合組織も含まれていなかった。

病理組織学的診断：頬表皮嚢胞。

症例2

患者：24歳 男性。

初診：平成元年10月■。

主訴：左頬部の腫瘍。

家族歴および既往歴：特記事項なし。

現病歴：3年位前より左頬部の腫瘍に気づいたが無痛性のため放置した。その後腫瘍は徐々に増大する傾向にあったため近医受診，当院を紹介された。

現症

全身所見：体格中等度，栄養状態良好で特記すべき事項は認められなかった。

局所所見：左頬部に直径約 15 mm の可動性を示す弾性硬の腫瘍を認めた（写真5）。その他口腔粘膜や皮膚には異常所見は認められなかった。

臨床診断：脂肪腫。

処置および経過：平成元年10月■，2%キシロカイン（含エピネフリン）局所麻酔下で口腔内より摘出した。すなわち腫瘍直上の頬粘膜に切開を加え，周囲組織より鈍的に剝離し，一塊として摘出した。周囲組織との癒着は認められなかった。

摘出物所見：大きさ 15×20×15 mm の表面滑沢な楕

写真 5 症例 2 初診時写真

写真 7 症例 2 病理組織像

写真 6 症例 2 病理組織像 (基底細胞層)

写真 8 症例 2 病理組織像 (コレステリン肉芽形成部)

円球形を呈していた。断面を入れたところ、黄白色でオカラ状の部分と赤褐色で充実性を示す部分とがあった。

病理組織学的所見：摘出材料は嚢胞性でその内容には扁平上皮細胞の被包が認められる。この扁平上皮の表面には角化層がありその直下に顆粒細胞層が扁平化し棘細胞層も不規則軽度肥厚している。基底細胞は一層あるいは重積像を示しているところがある(写真6)。また上皮の一部が深部に陥入しており部分的に上皮が欠損していた(写真7)。欠損部には巨細胞を含むコレステリン肉芽の形成像を示していた(写真8)。またこの被胞上皮外側直下は結合組織で包まれているが、炎症および異形分裂像は認められなかった。

病理組織学的診断：類表皮嚢胞。

考 察

類表皮嚢胞および類皮嚢胞は、身体各部に発生するとされており、New ら¹⁾は25年間に経験した症例のうち44.5%が肛門に、42.1%が卵巣に発生し、頭頸部に発生したものは6.9%であったと報告している。口腔領域において臨床統計的観察を行ったものは本邦においては玉

利ら²⁾、関本ら³⁾、土井ら⁴⁾、円林ら⁵⁾、大野ら⁶⁾などがあるが、どの報告も本嚢胞の発生は口底に最も多くその大半を占めており、頬部への本嚢胞の発生は比較的少ないとしている。また、最近では黒川ら⁷⁾が1960～1986年に本邦にて報告された本嚢胞の91例につき統計処理を行っているが、やはり口底が50例と最も多く、次いで顎骨の18例で頬部は11例であり、発生部位として頬部は比較的少ないと考えられる。

本嚢胞の病理組織学的分類は Meyer¹⁸⁾の分類が一般的に使われており、Thoma²⁰⁾もこれを支持している。すなわち、下記の3型に分類している。

1) 類表皮嚢胞：皮膚付属器官を有していない嚢胞壁で囲まれた上皮性嚢胞。

2) 類皮嚢胞：皮膚付属器官である汗腺・皮脂腺・毛嚢・毛髪などを有する嚢胞壁で囲まれた上皮性嚢胞。

3) 奇形腫：上皮腔壁に次の要素がある場合、i) 上皮組織や皮膚の付属器官から派生するもの、ii) 結合組織から派生するもの、iii) 呼吸器・消化器などから派生するもの。

本症例は2例ともに嚢胞壁は扁平上皮で被われてお

り、内腔には錯角化しているところやコレステリン肉芽を形成しているところがあるが、汗腺・皮脂腺・毛髪などの皮膚付属器官は認められなかったので、1型の頬表皮嚢胞と考えられる。

本嚢胞の内容物については液状のものから固形状のものまでさまざまな報告がされているが、本症例では2例ともに黄白色のオカラ状のものであった。

本嚢胞の発生機序については、従来より諸説が述べられている。一般的には先天的なものとされているが、一部には後天的とみられているものもある。先天説を称えるものには Bergmann²¹⁾の鰓弓癒合部における外胚葉の迷入説(鰓弓説)、Hassel²²⁾の頸胞の異常埋伏説、New¹⁾やColp²³⁾の鰓弓癒合部の残遺または無対結節の異常埋伏説などがあり、後天説を称えるものとしてはAnderson²⁴⁾やAckerman²⁵⁾の外傷・炎症説がある。症例1については2年前に2階より転落し左頬部を打撲し、その後同部にしこりができたとの患者の訴えから、2年前の転落事故の状況や治療についての資料の入手が困難なため明言はできかねるが、その時受けた外傷や炎症により上皮組織の迷入・残遺がその原因として推測される。症例2については、同部の外傷や炎症などの既往のないことから、鰓弓説に従うと胎生期における第一鰓弓から生じた上顎突起と下顎突起との癒合部に、外胚葉組織が迷入または残遺により生じたものと推測される。

本嚢胞の治療法は、外科的に全摘出することが一般的である。今回の自験例2例ともに全摘出した。

本嚢胞は、一般的に悪性化することはないとされているが、Thoma²⁰⁾はまれではあるが悪性化するとしている。

再発についても、少ないとされているが再発例の報告^{3,26)}もある。またFleming²⁶⁾は再発までの期間を2年としていることから、悪性化をも含め今後十分な経過観察が必要であると思われる。

結 論

今回、著者らは左頬部に発生した頬表皮嚢胞の2例を経験した。2例ともに24歳の男性で、1例は左頬部に外傷の既往があり後天的な上皮組織の迷入が原因として考えられ、1例は外傷などの後天的な既往がなく先天的なものと考えられた。そこで、その概要を若干の文献的考察を含めて報告した。

引 用 文 献

- 1) New, G.B. and Erich, J.B.: Dermoid cysts of the head and neck. *Surgery, Gynecology and Obstetrics* 65: 48-55 1937.
- 2) 玉利尚之, 馬渡和夫: 左側頬部に発生した頬皮

- 嚢胞の1例 付. 本邦文献(1957~1967)ならびに欧米文献の統計的観察. *日口外誌* 14: 106-112 1968.
- 3) 関本恵一, 大口忠彦, 他: 顎骨を含む全身に多発した epidermoid cyst の1症例. *口科誌* 21: 781-789 1972.
- 4) 土井 尚, 谷口幸治, 他: 頬部に発生した頬表皮嚢胞の1例. *日口外誌* 18: 384-390 1972.
- 5) 円林義一, 空閑祥浩, 他: 上口唇正中部に発生した皮様嚢胞の1例. *日口外誌* 22: 842-846 1976.
- 6) 大野邦博, 曾田忠雄, 他: 口腔領域の頬表皮嚢胞50例の臨床統計ならびに本邦における文献的考察. *日口外誌* 25: 842-847 1979.
- 7) 黒川英雄, 姫田東高, 他: 舌小帯に発現した頬表皮嚢胞の1例. *日口外誌* 33: 1655-1660 1987.
- 8) 吉成美予, 吉田幸子, 他: 頬皮・頬表皮嚢胞15例の臨床的観察. *日口外誌* 32: 47-53 1985.
- 9) 久保四郎, 浅田洗一, 他: 頬部に発生した頬表皮嚢胞の1例. *日口外誌* 23: 664-668 1977.
- 10) 松本正義: 表皮嚢胞(抄). *皮膚科紀要* 59: 324 1965.
- 11) 山下佐英, 増田敏雄, 他: 皮様嚢胞の11例. *日口外誌* 19: 480-487 1973.
- 12) 船越良一, 川本 強, 他: 頬部に発生した epidermoid cysts の2例(抄). *日口外誌* 20: 545-546 1974.
- 13) 姫野 宏, 佐藤 匠: 頬部に発生した epidermoid cyst の1例. *口科誌* 23: 255 1974.
- 14) 石原和弥, 佐々木 徹, 他: 頬部にみられた頬表皮嚢胞の1例(抄). *日口外誌* 20: 321 1974.
- 15) 松田 登, 大久保滋郎, 他: 当科における軟組織に発生した頬皮嚢胞・頬表皮嚢胞17症例の概要. *口科誌* 24: 109-116 1975.
- 16) 宇野 治, 友沢 基, 他: 左頬部に発生した頬表皮嚢胞の1例(抄). *口科誌* 25: 350 1976.
- 17) 川辺良一, 海野 智, 他: 左側頬部, 耳前部, 側頸部, 側頭部に多発した頬表皮嚢胞の1例. *日口外誌* 30: 231-234 1984.
- 18) 古田 哲, 高井克彦, 他: 頬部に発生した頬表皮嚢胞の1例. *日口外誌* 30: 1170-1174 1984.
- 19) Meyer, I.: Dermoid cysts (Dermoids) of the floor of the mouth. *Oral Surg* 8: 1149-1164 1955.
- 20) Thoma, K.M. and Goldman, H.M.: *Oral Pathology*, 5th Ed, Mosby Co, St Louis, 1960, p 924-928.
- 21) Bergmann, E.: *Handbuch der praktische Chirurgie*, 4 Auf 1st Ed, Stuttgart, 1913, p 976-979.
- 22) Hassel, R.: Die Mundbodendermoide Entwicklungsgeschichtliches Diagnostisches und Therapeutisches. *Beitr Klin Chir* 83: 332-351 1913.

- 23) Colp, R.: Dermoid cysts of the floor of the mouth. Surg Gynec Obstet 40: 183-195 1925.
- 24) Anderson, W.A.D.: Pathology, 8th Ed, Mosby Co, St Louis, 1985, p 1639-1640.
- 25) Ackerman, L.V. and Rosai, J.: Surgical Pathology, 5th Ed, Mosby Co, St Louis, 1974 p 97-102.
- 26) Fleming, J.F. and Botterell, E.F.: Cranial Dermoid and Epidermoid Tumors. Surg Gynec Obstet 109: 403-411 1959.
-